

(9) 不死鳥よ！専門部

一橋全学の支持から自力本願へ
独立運動の跡を追ふ

平和な一橋の空に稲妻の様に一瞬間現われては消える専門部独立の声
が如何なる経路をとつて発展したかを知るために十年前本紙発刊当時
に遡つて見なければならぬ。大正九年本学昇格と同時に附属
商学専門部は生まれおちたが彼の誕生が折しも起つた経済不況と相並
んで決して恵まれたものではなかつた事は大正十二年の専門部廃止問
題に端を發してゐる。之に対して時の主事奈任忠行氏を旗頭に於て猛
烈な反対運動を起したがこの時に既に独立気運は濃厚に働いてゐたけ
れど未だ実行運動には至らなかつた。次で昭和二年四月一日初代奈佐
主事に代つて現堀光亀教授が就任、以来独立熱は三十度の白熱状態に達
し明三年四月を以て独立しようと頭からかゝつて来たので専門部理事
会は九月二十八日三百数十名出席の下に「商学専門部は既に設立の当
初において過渡期の施設としてのみその存在を許され近き将来に於て
東京高等商業学校として独立せしむる予定なりき」なる声明書を満場
一致を以て可決した。

学長もまた専門部を独立せしめて全一橋の充分なる発展をなし得べき
土台を作つて置く事は当然の責任だと考へ、堀主事は勿論強硬に独立
説を主張し専門部はどうしても独立しなければならぬ。専門部が実
業専門教育の特徴を次第に失つて今日の様な体勢にあると云ふのは全
く附属制度がその因をなしてゐるのであつて丁度喬木の下に植付けられ
た苗木の様にその場所のまゝでは苗木はどんな努力が払われるとしても

立派に生長する望みはないと語り如水会有力者藤村義苗氏も種々考慮
を要する点もあらうが別段異議はないと云ひ伊藤多兵衛氏も独立には
賛成し助力を惜しまぬと言明した。斯てこの独立案は全一橋の問題と
なり三年一月二十八日午後二時より一橋Aホールに総会を開く事にな
り議長河野健治氏、「専門部が独立して別々になるのは情に於て忍び
ないけれど独立はお互のためであるからこの際涙を振つて賛成する、
然し徒らに一橋の名にとらはれないで自力独立されん事を望む」と述
べるや全学生歡呼して賛意を表し今や独立問題は「一橋二千の同人こ
ぞつて尽力する事になつた。之等の氣勢に押されて愈々専門部生は実
行に着手し要路の大官先輩に諒解を求め文部省においても這般の事情
を斟酌して明年度には多分実現を見るに至る模様となつた。

そこで独立実行委員十数名は本部を神田に移して目的貫徹に猛進し時
の文部大臣勝田氏に陳情書を提出して独立の一日も早からん事を
迫つた。

養生所生も相共に運動に参加し学校当局も腹をきめて独立をするもの
としての予算を文部省に提出した。斯くして八月八日には独立費追加
予算が計上され二十万円の昭和四年度追加予算として主計局で査定が
開始された。事件はそこまで進展した。あと一息と実行委員は折から
降りしきる霜雨をおかして涙ぐまじき努力を続けた。だが事件は然く
平滑には進まず独立予算は今年度は不承認になり終つた。但し文部省
に於ても独立問題は事実上(？)は承認するとの事だつた。越へて四
個更生の意気を以て七転び八起きと奮ひたち七月小橋文相当時に持ち
続けて江口定条氏、藤原義苗氏、内田信也氏を引入れて、予算通過ま
ではと意気込み暑熱の休暇を物ともせず働かかけたが八月に入つて

は陳情運動は一まづ打切つて省議の成行を唯待つ事になった。翌々六年十月専門部独立運動をけし飛ばして突如井上大蔵大臣の赤字補填の犠牲としての予科、専門部廃止案が一橋の頭上で炸裂した——龍城三日——これによつて一橋は所謂団結の美風を学び独立、分離の火の手は頭から冷水を浴せられた形となつた。

それにも不拘不死鳥専門部は翌七年灰燼の中から生れ出で六月十六日の専門部臨時総会には理事会提出の独立案が可決され全学生の興奮が高潮に達した時に堀主事は徐に登壇し説き来り説き去る内に果然例のヒマラヤ演説と化し七百の学生は陶然と魅了された。

その夜七時専門部教授会が如水会館に招集されたがその席上上田貞次郎教授は「独立は龍城事件の際すでに打切りとなつてゐる筈だ、これは永久に中止するのが至当である」と述べるや又永久が問題となり上田氏は憤然席を蹴つて退場するや専門部は自力本願に転じて同月十八日堀主事、星野、堀（潮）教授等を先頭に文部省に押しかけ学生側では又々神田の旅館へ出張本部を設け委員十数名が立て籠り錦町署員の神経をいらだたせながら最期的切札として文部当局を訪問する事となり主事から云はれた如く学長の紹介状を頂戴に参上したところ「やらぬ！」と一喝され二十五日文部省を訪問したところ独立不可能の最期的断案を下されてしまった。斯て十年に亘る専門部独立運動は七年六月三十日の総会で数年来働き続けた理事会総辞職で幕を閉じた。

第一九八号（昭和九年十一月十二日）

(10) 定款改正を境に内から壊れた一橋会

苦惱多きその歩み

「今日は午後から総会だ」
「有難い、また臨時休業か」

何の感興もなさうに飛出す会話を聞き流して講堂に行つて見ればパリパリと人が蒔いたやう、で総会とはこんなものかと思つて、十年の新聞を見ると思ひ出してもぞつとするやうな事件が一橋会史上に現れてゐる、これから其奴を拾ひ上げて見よう。

一橋会が生れたのは明治三十六年でそれが大正十二年かの大震災に一橋会は財政的に破綻しその上一橋会は漸く学生の魅力を失ひ一橋沈滞の聲が高まつた。更に大正十五年一橋会が校友会唯一つの社団法人となるに及びその定款内に理事七名を置き、その内四名は教授側からあと三名は学生側から選出する事とし従来の一橋会が学生の自治に任せられたに反し特別会員の参加、然も四名となつた。

こんな悲観材料を内部に臆して時代は昭和となつた。折柄新興の社会思想問題の研究は漸く華やかとなり、進歩的な学生は学内問題批判を開始した、即ち昭和二年今はなきSPSが定款改正問題に口火をつけた。やがて此の火は時代の波に乗つて昭和三年一橋批判の有志団体談橋会の定款改正上程となつた、これは理事会で拒絶したが更に談橋会ではこれを審議しようとし、当時学生監と問題をひき起し、本科会評議会の調停で手打ちといふ劇もあつた。一方一橋会には談橋会、予專の生活批判会から矢継早に総会開催が要求されるので、同四年学生理事数増員に関し本科評議員会の提唱で当局と学生が懇談したが対立のまま、で終つた。

然し結局同年末改正案は満場歓呼裡に通過した。即ち理事十二名中教授側三名、学生側九名で、に一橋会は学生の自治に帰した、然しこ